フェイユーリ魔法調査官　時の記憶は錬金術なり

灰野玻璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フェイユーリ魔法調査官　時の記憶は錬金術なり

【Ｎコード】
Ｎ５０１８Ｒ

【作者名】
灰野玻璃

【あらすじ】
「私から逃げられると思ったら大間違いですよ？」「あなたのこと、好きなんて言っていないでしょ！」魔法司祭と魔法司書。魔法二大機関が誇る二人の共同戦線。毒舌男ｖｓ氷河娘に、恋は訪れるのか？

魔法の恵み

魔法はどこにでも存在する。
そう、あなたの隣にも。
　魔法は恵みをもたらす。
魔法は禍をもたらす。
どちらも本当のこと。
――それでは、良い魔法を。

魔法の恵みで世界が環(めぐ)る、ルアンジラキア大陸。その中でも大陸東域は深い森と澄んだ湖という霊脈の源が点在し、古来より魔王ユ・ル・イクトの加護を受け続けているため魔女や魔法使いの血筋も多い。

東域の魔法の環(めぐり)を管理しているのは、二つの機関。
東域魔法王庁(ヴォ・ローラルミア)と東域王連(ヴォ・アルヒフ)魔法図書館。
この二つの機関は、魔法の環(めぐり)を正しい形に導く大事な使命を担っている。東域魔法王庁(ヴォ・ローラルミア)は魔法使いや魔女の中が所属する組織としては最高峰で、魔法そのものを研究し、そして禍を退けるために魔法を管理している。一方、東域王連(ヴォ・アルヒフ)魔法図書館では、魔法の指南書、強い力を持った魔法使いや魔女が遺した書物、そして魔法そのものが込められた書物などを管理している。その職務には重なる部分も多くあり、時に競い、時に協力して世界の均衡を維持しているのだ。
　この両機関の本部・本館は、東域北西の魔法大国フェイユーリ王国の王都エリルクォルにある。
　そして、時を操る魔法使いの魔法司祭(スヴィアシェニク)とすべての書物の言葉を記憶する魔女の魔法司書(アルヒファリ)が、この街で出逢った。
　物語は、ここから始まる――。

魔法の恵み（後書き）

ルアンジラキア大陸シリーズ。『夜の舞いは恋の召喚魔法』の約三〇〇年ほど前の物語。意外なところで人物が繋がる（はず）。

だらだら長く続く、日常系事件簿になったらいいなと思います。

＊２０１１．０３．２０　シリーズ都合上、二ヵ所変更。

魔法司書ジェルランシア、日常の崩壊

果実月三日。新年が明けてから九番目の月。寒冷地帯のフェイユーリ王国では、もう秋の気配が色濃く感じられるようになった。

ジェルランシアはいつもと同じように、魔法司書（アルヒファリ）の業務に没頭していた。

いや、埋没していた。

彼女の周りをぐるっと囲むように、未整理の書物が塔となって乱立している。一六歳にしては小柄なジェルランシアの姿は、書塔の外側からは見えない。この膨大な数の書物は、すべて分類通りに振り分けて書架に戻さなくてはならない。それが今日の午前中のジェルランシアの仕事だ。しかも魔法司書の規則では、業務中に魔法を用いてはいけないことになっている。安易に魔法を発動させることで、別の魔法書に影響が及ぶのを防ぐためだ。つまり、この書物の塔は手作業によって整理されなければならない。だがそれは、彼女にとってはさほど苦痛な作業ではない。

ジェルランシアは、手前の書塔の頂上から一冊を取る。

『赤き王女の魔法』

「ああ、これ。総記の魔法学ね」

それを台車の上に載せた。そして、次。

『砂漠の館チェラーシュカ』

「これは、産業魔法の運輸」

台車に乗せる。

その作業が数分続いただろうか。ジェルランシアは、一度も書物捲って内容や分類記号を確認することなくすべての書物を分類ごとに整理してみせた。

東域王連立魔法図書館（ヴォ・アルヒファ）は、ルアンジラキア大陸に現存するすべての魔法書物の原典を所蔵しているのだが、ジェルランシアはそのすべてを読み、一言一句を記憶している。そのため、いちいち確認

しなくても整理が可能なのだ。他の司書ではこうはいかない。ジェルランシアが持つ魔力特性なのだ。そしていつしか、同僚たちにこう呼ばれるようになった。『歩く書架』もしくは、『記憶の箱』と。

先ほどの台車を押して、書架に書物を戻している時だった。同僚のペルネシカが近付いてきた。長身ですらりとした栗毛の美人である。

「ジル、館長が呼んでる。あとはあたしがやっておくから」

ジルとは、ジェルランシアの愛称である。女性愛称としてはジェラ、ジーラがふさわしいのだが、ジェルランシアは好んで男性愛称のジルを使っている。

「ええ、どうして。わたし、何もまずいことやってないと思うけど。業務中に読書をするくらいで」

どういう組織であれ、上司に呼び出されて良いことを想像をする者はまずいないだろう。勿論、業務中に読書をしていれば、怒られる理由になってもおかしくはないのだが。

「あー……。あたしの口からは言いづらいんだけどさ」

男装の麗人という言葉がふさわしい容姿のペルネシカだが、意外に繊細で気遣い屋だ。性格を言えば、ジェルランシアの方がずっと男前だろう。

「お隣（東域魔法王庁）さんから、お客（魔法司祭）が来ているみたいだよ」

ジェルランシアの動きが止まる。東域魔法王庁（ヴォ・ローラルミア）の魔法司祭（スヴィアシェニク）と言えば、八対二の割合で魔法使い、つまり男が多い。同じ割合で魔女の多い魔法司書（アルヒファリ）とは真逆だ。

拒否権を発動したい。このまま地下の閉架書庫に逃亡してもいいだろうか。

「駄目だと思うけど。館長直属の魔法司書（アルヒファリ）が、ジルの逃げそうな場所を固めてるみたいだし」

ジェルランシアの心境を察したペルネシカが言った。ほくそ笑む館長の顔が思い浮かぶ。

「……わかったわ。とりあえず、行ってみる」

魔法司書ジェルランシア、日常の崩壊（後書き）

元気で、一筋縄ではいかないような女の子主人公が好きです。
ジェルランシアの苦悩の日々は、ここから始まります。

魔法司祭ルスラン、獲物を見つける

ペルネシカと別れ、開架書庫から出たジェルランシアは大きな溜息を吐いた。本当ならば、館長にもなるべく会いたくないのだ。だが無情にも、ジェルランシアの足は館長室の前まで辿り着いてしまった。

「ジェルランシア・レメシュヴァ上級魔法司書、参りました」

静かに、扉を叩く。

「どうぞ、入ってください」

柔らかく優しい声が響いた。ジェルランシアは、半分青くなりながら扉を開いた。今にも卒倒しそうだ。

「ジル、少し時間がかかりましたね」

金髪碧眼、左眼に片眼鏡（モノクル）を掛けた館長、レフ・ヴォエヴォーダ。美しい若い男だ。

「大丈夫ですか、ジル？」

ジェルランシアは、極度の男嫌いなのだ。特に、若い男に対する拒絶反応は大きい。それはジェルランシアの家庭環境に起因するものなのだが、それはまた別の機会に明らかになるだろう。

「……え、ええ。なんとか。お気になさらず絶対に見つめたり触れたりしないでくださいお願いします」

必死の訴えだった。この様子はいつものことなので、レフも特に気にしてはいない。むしろ、ジェルランシアが落ち着いて業務に当たれるよう、男性魔法司書との配置を遠くしたり、話がある時は誰か別の魔女を間に挟んだり、色々と気を遣ってくれている人なのだ。

「それじゃあ、仕事の話に入っても構わないかな。こちら、僕の友人のルーアン」

レフは、ジェルランシアからだと死角になって見えていなかった方を手で指し示した。つい、数歩前に進んで、その手の先を見てしまう。

「東域魔法王庁筆頭魔法司祭（ヴォ・ローラルミア）、ルスラン・ザヴェリューハです」
低く凛と響く声。長めの黒髪に紫の瞳。かなりの長身。勿論、若い男。それも、かなり艶っぽい美青年だ。ジェルランシアでなければ、一瞬で恋に落ちても不思議ではない。
「彼と、ガイルークに行ってほしい」
「はい？」
ガイルークは、フェイユーリ王国の南東エレムルィキン帝国の都市である。つまり、遠征だ。このルスランという魔法使いと一緒に。冗談ではない。
「君の体質……苦手は承知しているけど、これは魔法の存亡に係わる大事な任務だ。膨大な知識を自由に操れる君にしか頼めない」
「そんな……」
確かに魔法司書として給料をもらっている以上、上司の命令に逆らうことはできない。押し黙ったジェルランシアに示すように、レフは資料を机に置いた。目を通しておけということだろう。
「ヤスミナに運河船の手配を任せてある。夕方の便です、遅れないように」
もう後には引けない。
ルスランの瞳が妖しく光るのが目に入った。

魔法司祭ルスラン、獲物を見つける（後書き）

魔法司祭ルスラン。
まだ一言しか喋っていないのでなんですが、きっと変態です。
そういう趣旨です。
＊２０１１．３．１１　誤字脱字修正しました。

運河船の一夜（前書き）

『らぶえっち』な部分に入ります。
苦手な方は、お気を付けください。

運河船の一夜

館長に渡された資料には、ジェルランシアを魔法調査官に任命する通達書が挟んであった。魔法調査官は、魔力や霊脈の異常が報告されたり、新しい魔法書が発見されたりした場合に、その地に赴いて調査をする遠征任務である。

だが、今回の任務は少し変わっていた。まずガイルークで霊脈の乱れが確認され、ついで魔力汚染が起きた。魔力汚染は放っておくと精神に異常を来たす恐れがあるため、すぐに東域魔法王庁（ヴォ・ローフルミア）の司祭数人が魔法調査官として派遣されたが、調査途中で相次いで失踪。中途だった調査報告によると、魔力汚染の種別は＜青＞、つまり何者かがガイルークの霊脈から魔力を掠め取ったのだ。それも、魔力汚染を引き起こすほど大量に。

「錬金術師ユーリー・ベルイフ。約九二年前に魔法使いとして名を馳せた男ですが、彼のやり方と非常に酷似しています。というか、彼の仕業でしょうね」

南に下る運河船の一室。資料を前にルスランが詳細を説明している。彼は扉に近い壁際に立ち、ジェルランシアは彼から一番遠い寝台の端に腰掛けている。眉間の皺は消えることがないが、なんとか卒倒せずに済んでいる。職務だと思えば、意外と耐えられるものだ。ガイルークの隣の運河都市メドゴラトに着くのは明朝、それまで気が抜けない。

「でも、伝記では、彼は打ち倒されたことになっています」

魔法犯罪の分類にある彼の伝記にはそう記されている。魔法使いや魔女は、常に魔力に触れているためか基本的に長生きである。寿命に関しては、普通の人間の一三倍と言われているくらいだ。だが魔力によって鍛錬された魂が打ち砕かれた場合はその限りではない。まさにユーリー・ベルイフは、魂を打ち砕かれて滅ぼされたはずだった。

「私が担ぎ出された理由はそこです。東域魔法王庁（ヴォ・ローフルミア）では、ユーリー・ベルイフは最重要危険人物なんですよ。彼は、錬金術で不老不死を得るため、魔力を食らったのです」

「魔力を、食らう……」

歴史的には珍しいことではない。不老不死やより強い魔法を得るために魔力を食らった魔法使いや魔女の話は意外と多い。だがそのすべてが、最終的に魂を滅ぼしている。魔力は本来、自然の環（めぐり）や血の環（めぐり）によるところが大きく、それ以上の魔力を望むなら魔族と契約するしかない。だがその契約のほとんどは、魂と引き換えになる。

ふと思った。二十代半ばという若さで東域魔法王庁（ヴォ・ローフルミア）の筆頭魔法司（スヴィアシェ）祭（ニク）を務めるルスランは、どれほどの魔力を持っているのだろう。彼も、更なる魔力を欲したりするのだろうか。

「私の場合、魔力を食らうより、女性を食らう方がいいですね。例えば、あなたを」

いつの間にか、距離が詰められている。視界が反転する。天井が見えた。ルスランの肩越しに。

「ひくっ……」

驚きと恐怖のあまり、喉が締まって声が出ない。ええと、こういう時は股間を蹴り上げるのが乙女の嗜み。だがルスランの膝に挟まれた彼女の脚はびくともしない。卒倒しそうだ。すでに押し倒されているが。それにここで失神したら、間違いなく食われる。

「とろりとした蜂蜜色の長い髪、滑らかな白い肌、幼い顔立ちに女性らしい曲線。どれをとっても私の好みですよ」

指に取ったジェルランシアの髪に口づける。小柄で童顔なジェルランシアだが、実は身体の発育は決して悪くない。むしろ、美少女と言える童顔との不均衡さが却って扇情的に見えるほどだ。そのせいで、嫌な目にも遭ってきている。だからこその男嫌いだ。

「あなたの男嫌いなんて、私の腕の中で消えてしまいますよ」

その言葉で、ジェルランシアは我に返った。手に触れた枕を掴んで、ルスランの顔に押し付けた。

「ぶっ……！」
その隙に、ジェルランシアはさっと身を引いて扉の近くまで逃げる。面目丸潰れの美青年に少し笑えた。
「ふんっ！　押し倒されたことの一度や二度、なかったわけじゃないわ！　しっかり反撃方法を会得済みよ！」
何とも情けない理由だが、様々な反撃方法で自らの純潔を守ってきたことは事実である。
「……なるほど。あなたの男嫌いは、相当に根が深いようですね。少し油断しました」
恐らく、今まで彼に迫られて拒絶した女性はいないのだろう。ジェルランシアも、彼の美貌に何も感じないわけではない。だが、過去に植え付けられた恐怖心が、『男』を拒絶するのだ。
「ですが、夜は長い。たっぷり楽しむことにしましょう」
負けるつもりはない。いやそれより、明日からの任務のことを考えてほしい。
ジェルランシアの苦悩は、まだ始まったばかりだ。

運河船の一夜（後書き）

ルスランは女たらし。そして手も早い。
ジェルランシアは容姿が容姿だけに、結構酷い目に遭っています。
まだ純潔を守り抜いている、強い女の子ですが。

果実月三日、晴れ

ああ、もう日付が変わってる……。

抱く、抱かれないの攻防でもうすぐ朝になりそう。ルスランは疲れてやっと眠ったみたい。館長室ではすました顔をしていたのに、あんなに変態な色情魔だとは思わなかった！

わたしも自分の部屋に戻りたいのだけれど、ルスランが魔法で施錠してしまったせいで、出られなくなった。魔法の解読に一時間かけてみたけど、うんともすんとも言わず……。さすが、筆頭魔法司祭。

今日は床で寝ます。純潔は守ります。

明日からの調査が思いやられる……。館長め、許さん。

果実月三日、晴れ（後書き）

日常系ラブコメを目指しているので、このように『断章』として登場人物の日記が入ります。

過去の傷と初めての温もり

頭が痛い。ほとんど眠っていないのだから、それもそのはずだ。勿論、多少の船酔いもあるだろう。運河は波が穏やかだとは言え、揺れていることに変わりはない。それに昨夜に限っては、ジェルランシアは寝台ではなく床で寝ることになってしまい、体の節々も痛むのだ。

メドゴラドに着くと、東域王連立魔法図書館（ヴォ・アルヒフ）が手配した馬車が二人を待っていた。

「ガイルークは初めてですか？」

密室の沈黙は気まずい。視線は窓の外に向けたまま、窓に移る漆黒の美青年に声を掛けた。手元の書類に険しい顔を向けているルスランは、ゆっくりと焦点を合わすように気怠い眼差しをジェルランシアに返す。

「いいえ、魔法調査官の任務で二度ほど。随分と昔ですが。ジル、あなたは？」

「――え、と。初めてです」

どさくさ紛れに愛称で呼ばれた気がするが。

「魔法調査官の任務は何度かこなしたことがあります」

同じ仕事とは言え書庫に詰めているのが好きなジェルランシアは、あまり好んで魔法調査として遠征することはない。だが『歩く書架』としてお呼びがかかることも多く、最近も東の街の魔力汚染を聖浄化してきたところだ。

「それは、魔法司祭（スヴィアシェニク）と一緒に？」

「まさか！　同僚の魔法司書（アルヒファリ）……魔女とです」

詳しく言うなら、ほとんどがペルネシカと組んでの仕事だ。冗談でも、男性魔法司書（アルヒファリ）や魔法司祭（スヴィアシェニク）と一緒に遠征など勘弁してほしい。以前一度だけ、館長のレフ・ヴォエヴォーダと館長秘書の魔女ヤスミナとの三人で魔法調査をしたことがあるが、館長とジェルランシ

アの間には常にヤスミナを挟んでいたような気がする。
「――ご存知だとは思いますが、わたし、男性が苦手なので。今回の任務も、館長命令で仕方なく受けたまでです」
ジェルランシアは、館長レフに頭が上がらない。勤務配置で配慮してもらっていることもあるが、もう一つの理由が大きい。彼女は、館長許可の下、持ち出し禁止の書物の持ち出しを自由にしているのだ。
「――男性不信の理由は教えていただけないのですか？　この任務は簡単に終わるものではありません。そうなれば、長期間二人きりで宿を共にすることにもなります。失礼があってはいけませんからね。……私の欲求に対しては、そのうちお応えいただくとしても」
まだ諦めていなかったのか、この男は。
ジェルランシアの体が、一瞬強張る。
「……理由、ですか」
「原因、と言った方がいいかも知れませんね」
男嫌いの原因。それは、育ってきた環境がジェルランシアに悪く作用した。簡単に言えばそういうことだ。
「……想像に難くないと思います。」
恐らくルスランは、ある程度わかって訊いているのだろう。神妙な表情でそれ以上は何も言わないが、硬くなって俯くジェルランシアの横顔に掛かる蜂蜜色の毛先に、優しく指先を触れさせた。びくりと身体に緊張が走る。だが、それ以上は手を伸ばさない。そこに、彼の優しさを感じた。
「……兄が二人いるんですが、その友人たちがよく家に出入りしていて。大事には至りませんでしたが、兄が友人たちを病院送りにする程度にはひどいことをされました」
そして、男女の差異を感じ始めたばかりだった十歳前後の少女にとって、男性という生き物は自分に禍を為す者として認識されてしまったのだ。それからというもの何故か、成長するに連れて男性に迫られることが多くなった。面白半分、好奇心、本気の求愛と色々

だったが。
「それで、男性を返り討ちにする戦法を学んだと」
「ええ。いけませんか？　言っておきますけど、あなたも同じ運命です」
強気を取り戻したジェルランシアは、身を引いて態勢を整える。ルスランの指先から蜂蜜が擦り抜け、少し物足りなさそうな顔を見せた。
「いいでしょう。まぁ、その辺はどうにでもなります」
合点がいったという表情か、二人の間に流れる緊張を押し出すように挑戦的な笑みで、ぐっとジェルランシアに体を近付けた。反射的に壁へ逃げる。
「え？」
「返り討ちに遭わない方法。――合意へ持ち込むだけですよ」
甘い香りがジェルランシアの鼻先を掠めた。
「！」
不意に落ちてきた唇は、初めて感じた優しい温もりだった。

過去の傷と初めての温もり（後書き）

まだ距離のある二人なので、色っぽい会話にはなりにくい。
それでもなんとかくっつけようと必死です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5018r/

フェイユーリ魔法調査官　時の記憶は錬金術なり

2011年4月1日21時51分発行